

## 躯幹部 CT による口腔顎顔面悪性腫瘍遠隔転移の評価

○高橋 章 , 中村 竜也\*  
 多田 衣里\*\* , 前田 直樹\*\*\*  
 菅原千恵子\*\*\*, 工藤 隆治\*\*\*  
 久保 典子\*\*\*, 川口 真一\*\*\*  
 細木 秀彦\*\*\*, 岩崎 裕一\*\*\*  
 誉田 栄一\*\*\*

徳島大学医学部・歯学部附属病院歯科

\*徳島大学歯学部 5 年次

\*\*徳島大学歯学部 4 年次

\*\*\*徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

口腔顎顔面放射線医学分野

口腔顎顔面領域悪性腫瘍の遠隔転移検出に対する躯幹部 CT の有用性を検討した。遠隔転移検索目的で1999年4月から2003年12月までの期間に歯科放射線科で躯幹部 CT を実施した159名247検査を対象とし、うち166検査は造影剤併用検査であった。これらに検討を加え、(1)遠隔転移検出には CT が有効である (2)治療開始前に躯幹部 CT を積極的に活用する (3)造影剤併用の有無で検出頻度に差はなかった (4)頸部リンパ節転移を有する症例は遠隔転移高リスクである (5)初診から6カ月までは転移高リスクの状態であるという結果が得られた。従って遠隔転移検索目的には躯幹部 CT を、①初診時にルーチンで利用する ②頸部転移がない場合には定期検査の必要性は低い ③頸部転移が見られた際には遠隔転移高リスクと考え、その後6~12ヶ月程度までは定期的に検査を実施するという運用が現状では適切と思われた。

## 上歯肉扁平上皮癌に対する高線量率モールド照射の治療経験

○工藤 隆治 , 工藤 景子\*  
 湯浅 哲也\* , 尾崎 享祐\*\*  
 生島 仁史\*\*\*, 長山 勝\*  
 誉田 栄一

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

口腔顎顔面放射線医学分野

\*\*徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

口腔顎顔面外科学分野

\*\*徳島大学医学部・歯学部附属病院放射線科

\*\*\*徳島大学医学部・歯学部附属病院放射線部

$^{192}\text{Ir}$  線源を使用した高線量率 Remote After Loading System (RALS) の線源の外径は約5mmでアプリケーションを刺入/挿入できる部位ならどこでも治療が可能で、線源を留置しないので、患者は一般病棟に入院可能で、医療従事者等の被ばくがない。また、線量率が高いため

1回の治療時間は約5分と大幅に短縮される。今回、われわれは、高線量率 RALS を用いた1例を経験したので、その概要を報告する。

患者は80歳、女性。上顎歯肉扁平上皮癌 (T2NOMO) の診断下に、計60Gyの外照射終了後、歯肉表層に腫瘍の残存を認めた。著明な骨浸潤は認めず、肺機能が悪く手術適応がなかったため、高線量率 RALS による50Gy/10分割、1日2回/5日の治療を施行した。放射線治療補助装置としてモールドを用いた。治療終了後2ヶ月経過し、顎堤に骨露出がみられるが、肉眼的に腫瘍の残存は認めず頸部リンパ節転移も認めない。